

研究報告

ホームレスに対する地域生活への移行支援（2）

—キリスト教団体による人間関係の回復—

佐藤 至英

北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

抄 録

わが国におけるホームレス支援にかかわるキリスト教団体の支援内容ならびに支援活動の実態は何か、ホームレスが地域生活へ移行するために必要な心理的支援は何かを明らかにするため、2014年8月23日（土）から25日（月）、大阪市西成区（釜ヶ崎地区）にて、在日大韓基督教会大阪西成教会、在日大韓基督教会浪速教会（愛の家）、日本福音ルーテル教会「希望の家」、野宿者ネットワークにおいて、ホームレス支援の実態に関する聞き取り調査を行った。その結果、各団体のできることを分担し、連携した地域支援を行っていること、ホームレスや日雇い労働者も含め、子どもの遊び場から高齢者の居場所まで、幅広い生活の場を提供していることが明らかとなった。今後の課題として、釜ヶ崎キリスト教協友会を介した、韓国系キリスト教団体との連携協力、地域社会につなぐ支援、「あいりん総合センターの立て替え問題」に伴う釜ヶ崎のこれからについて、考察を行った。

キーワード：ホームレス、自立支援、人生支援、韓国系プロテスタント教会

I. 問 題

2003年1月から始まった全国調査によると、2014年1月、全国のホームレス数は7,508人、2013年調査よりも757人（9.2%）減少。最も多いのは大阪府1,864人、次いで東京都1,768人、神奈川県1,324人、政令指定都市別では、大阪市1,725人が最も多く、東京23区1,581人、横浜市580人、川崎市490人、福岡市245人の順になっている。札幌市のホームレスは昨年調査より増えて、50人であった（2014年1月全国概数調査）。

景気回復が続く中、完全失業率は2015年3月現在3.4%（228万人）、2014年平均3.6%より減少傾向にある。厚労省による調査が始まった1985年の相対的貧困率は年々増え続け、2012年現在16.1%、18歳未満の子供を含む「子供の貧困率」が16.3%と過去最悪となった（2014年7月国民生活基本調査）。生活保護利用者は2015年2月現在、216万9,165人（161万8,685世帯）、生活保護をもらえる人は多くなったが、生活保護にむすびつかないケース、深夜喫茶やネットカフェなどでたむろしている若者たちの存在が問題視されている。また本人の生活能力の問題などの理由により、ホームレスの状態に戻って

しまう人も少なくない。

NPO等による民間支援団体によるホームレスの支援については、その先導的役割を果たしてきた経緯から、これまでにいくつかの調査がなされており、その内容についても報告書等を通して知ることができる。その中心はホームレス状態から脱する第一次および第二次レベルであるハウスレス（物理的物件の喪失）への具体的な支援、さらに第三次レベルの支援へ拡大していることが明らかになっている。他方、もう一つの支援団体であるキリスト教団体の活動について、昨年2013年の調査（佐藤、2014）では、わが国のキリスト教会系団体が連携協力し、それぞれのできる支援を行っていること、各民間支援団体による支援は第三次レベルにまで展開し、生活困窮家庭の子どもたちへの支援を始め、貧困の連鎖を断ち切る支援が新たに開始されていることが明らかとなった。しかしながら、当初からわが国で支援活動を行っている韓国系プロテスタント教会については、白波瀬（2007）の調査はあるものの、日本のキリスト教会系団体との関係も含め、十分に知られていないのが現状である。

本報告は、わが国におけるホームレス支援に当初からかかわってきた釜ヶ崎地区における韓国系キリスト教団

体の支援活動に着目し、わが国におけるホームレス支援にかかわるキリスト教団体の支援内容は何か、人と地域とのつながりを支援する活動の実態は何か、他の支援団体とどのような関係にあるのか、ホームレスが地域生活へ移行するために必要な心理的支援は何かについて、検討することを目的とした。

Ⅱ. 方 法

2014年8月23日（土）から25日（月）、大阪市西成区（釜ヶ崎地区）にて、在日大韓基督教会大阪西成教会、在日大韓基督教会浪速教会（愛の家）、日本福音ルーテル教会「希望の家」、野宿者ネットワークにおいて、ホームレス支援の実態に関する聞き取り調査を行った。在日大韓基督教会大阪西成教会の金 武士牧師、在日大韓基督教会浪速教会（愛の家）の金 鐘賢牧師、日本福音ルーテル教会「希望の家」の園田克也代表、また野宿者ネットワークの生田武志代表に面談し、支援活動の現状ならびに今後の課題について、インタビューを行った。

Ⅲ. 結 果

1. 釜ヶ崎の実態

釜ヶ崎は、大阪市西成区北側にあり、1泊1,500円前後、3畳一間の簡易宿泊所と呼ばれる日雇い労働者向けのホテル（現在、多くは共同住宅に転業）などが建ち並ぶ、広さ約0.7km²の地域である。1960年代高度経済成長期、大量に労働者が釜ヶ崎に流入、1970年大阪にて万国博覧会開催を機に、建設・土木関係の仕事が急増、釜ヶ崎の日雇い労働者人口は当時で約30,000人を超えた。現在は、経済的な不況、労働者の高齢化などの影響から、仕事に就けない人が増え、野宿生活者（ホームレス）はこの地区を中心に約2,000人近い。お昼時の釜ヶ崎、炊き出しの長い列ができる。道路の脇にきちんと列をつくっている光景を目にした。列に並んでいる人たちには、高齢者が多いが、若者も目立つ。互いに言葉を交わしている様子はない。一人ひとりがただじっと自分の番を待っているように見えた。

2. キリスト教会団体ならびに民間団体による支援の内容

地域の活動団体は100以上ある。大別して、NPO 法人釜ヶ崎支援機構を中心とする民間支援団体、わが国のキリスト教系団体が連携支援する釜ヶ崎キリスト教協友会、そして韓国系キリスト教団体がある。主な活動内容

は、ホームレスをはじめ、子どもから日雇い労働者、生活保護を受給する高齢者などを対象に、ホームレスの寝場所確保としてのシェルター事業、高齢者特別清掃事業、福祉相談や生活サポートなど、さまざまな支援を行っている。この地域の半数近くは生活保護受給者であるが、他の地域ではみられない、ホームレスや日雇い労働者を含めたコミュニティが形成されている。毎日、どこかで炊き出しが行われ、体調が悪ければ無料で診察してくれるところがある。その意味で、釜ヶ崎は全国的にも特殊な地域福祉を実現している。以下にインタビューによる、主な支援団体の活動を記す。

日本福音ルーテル教会釜ヶ崎デイコニアセンター「希望の家」

1976年より、釜ヶ崎キリスト教協友会のメンバーとして支援活動を行っている。特に日雇い労働者も含め、アルコール問題への取り組み（通所のアルコール依存症「回復プログラム」）を中心的な活動としているのが特徴である。その他、病院訪問、生活相談、路上生活相談などの活動を行っている。毎週開かれる「回復プログラム」会合には、継続して参加する人とつながらない人がいること、一人ひとりに応じたかわりが求められるが、スタッフの人数に制約があることが課題であると語っていた。

在日大韓基督教会大阪浪速教会（愛の家）

1997年から、野宿生活者に対して、週1回おにぎりとお味噌汁を配布、夜回りを開始した。野宿者への宣教を主な目的として、アパートでの共同生活、毎週2回（木曜、日曜）の伝道集会と食事提供、毎週金曜日炊き出しなどの生活支援を行っている。アパートでの共同生活から就労へとつながる事例を伺った。核となるのは信仰である。金 鐘賢牧師は、「神の家族」として、元ホームレスと接し、生涯をともに生きる「家族」としてのつながりを大切にしていると語っていた。

野宿者ネットワーク

1980年代から、野宿や生活保護の社会・貧困問題にボランティアとして、取り組み、毎月1回西成公園にて野宿者との交流、毎週土曜日の夜回りを実施し、生活相談、就労支援、行政側の管理体制（防犯カメラの設置）の強制排除に対する対応を支援している。とくに「ホームレス問題の授業づくり全国ネット」を立ち上げ、全国の子どもや若者たちに、「ホームレス問題」への理解を促し、あらゆる命・人権を尊重するための「授業の実践」活動を行っている。近年、発達障がい疑われる若者、療育手帳をもらえないボーダーのホームレスが増え



日本福音ルーテル教会釜ヶ崎デイコニアセンター希望の家

てきていることから、このような若者を生活支援につなげるのが課題であるとのことであった。

教会という場に安心・安全を求める人がいる一方、教会の雰囲気になじめず、他のところに支援を求める人がいる。釜ヶ崎にはさまざまな団体による支援があり、生活に困窮する人はどこに助けを求めるかを選ぶことができる。この釜ヶ崎でホームレス支援をしている日本のプロテスタント教会（救世軍）の方が、「ホームレスはここにいる限り、日々の糧は保障され、病気になっても診てくれるところはあり、一生、この地で生きていくことはできる。でもここを出て生きていくことはできないだろう」と語っていた。高度経済成長の日本がもたらした社会問題を背負ったここ釜ヶ崎はある意味で、他ではみられない、地域福祉の一つの形を現している。

Ⅳ. 考 察

1970年、カトリック・プロテスタントの教会ならびに修道会など5団体により結成された釜ヶ崎キリスト教協友会（現在11団体）は、韓国系キリスト教会と連携した活動を行ってはいない。

韓国系キリスト教会は、「布教」を第一とする支援であるのに対し、釜ヶ崎キリスト教協友会は、「生活支援」が第一の目的であり、「布教」ではない。ホームレスに対し、何が必要とされ、何ができるか、キリスト者としてどうかかわっていくのかに中心に置く。釜ヶ崎キリスト教協友会と野宿者ネットワークとは、釜ヶ崎支援団体による定例の会合を通じたつながりはあり、相互の情報交換がなされている。しかし、韓国系キリスト教会



在日大韓基督教会大阪浪速教会（愛の家）

と他の支援団体とのつながりはない。

当事者への直接支援として、野宿者ネットワークでは、ホームレスとの対話を通じて、今、何に困っているのか、現在抱える問題に直接的な援助、生きるための支援を行っている。

ふたたび路上に戻らないための支援として、「希望の家」によるアルコール依存症「回復プログラム」は、1年間にわたる通所の支援であり、小グループによる作業療法、絵画療法などの心理的支援を行っている。

貧困と虐待の連鎖を断ち切る支援として、野宿者ネットワークでは、「ホームレス問題の授業づくり全国ネット」活動を通し、あらゆる命・人権を尊重するための「授業の実践」を展開、子どもたちや若者に対して、ホームレス問題に対する正しい理解を促している。公衆衛生でいう第1次予防としてのホームレスにならないようにする支援、貧困と虐待の連鎖を断ち切る次世代への啓発を提唱している。また、一人親家庭や貧困家庭への支援として、「こどもの里」と「山王こどもセンター」の2施設では、「こども支援」が行われている。子どもの遊び場、虐待防止の場、そして生活の場を提供している。対象は子どもだけではなく、「こどもの里」を卒業した大人や親もまた利用している。施設代表が里親となって、一時保護委託、緊急宿泊を受け入れ、虐待（ネグレクト）防止、子育て支援の拠点として機能している。

人は出会いによって、何かが変わり始める。私たちはお互いの存在、関係なくしては満たされない。地域とつながっている限り、生きていけることを実証している韓国系キリスト教会。共同生活を通じた支援を行っている韓国系キリスト教会では、地域生活を保障する場を提供するだけでなく、福音を通じて、自立支援から人生支援へ、人生すべてにわたる支援を行っている。

今後の課題

韓国系キリスト教会と我が国のキリスト教団体との協働、各民間支援団体との連携など、各団体のできることを分担した連携支援の可能性はあるのか。一つの可能性として、釜ヶ崎キリスト教協友会のメンバーである超教派の日本キリスト教系団体を介し、韓国系キリスト教団体とつながりを持ち、連携協力した地域社会につなぐ支援が考えられる。多様な支援がなされているこの地域で、そもそも連携する必要があるのかも含め、今後の課題である。

さらにまた「あいりん総合センターの立て替え問題」がある。釜ヶ崎にある「あいりん総合センター」（①職安・労働福祉センター、②大阪社会医療センター付属病院、③市営住宅が入っている）の老朽化にともない、立て替えか移転かの問題が浮上している。かつてはここが実際に日々の職に就ける場であり、また同時に互いに交流する場所でもあった。朝は職を求める人であふれかえる場所も、夏の暑い日にはここが日陰になり、暑さをしのぐ憩いの場にもなっていた。移転となれば、これまでの釜ヶ崎は解体され、日雇い労働者やホームレス、生活保護受給者にとって、住みにくい街になる恐れがある。

2012年6月、「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法一部改正案」が可決、ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法の有効期限が平成29年8月6日まで5年間延長された。もともとは地方出身者が大半を占

めた地域が、今は高齢化が進み、高齢者への支援が新たな課題となっている。また新しくこの地域に入ってくる若者たちの存在もある。何らかの障害を抱え、自らの苦渋を訴えることができない人、障害者手帳をもたず、働きたくても働き口が見つからない人、就職できても何らかのトラブルから離職を繰り返す人。地域とのつながりがなく、孤立してしまう人たちに支援の手をどうさしめるか、支援をつなぐか。これからの釜ヶ崎はどう変わるかが、地域福祉の新しい形を知る手がかりとなると考えられる。

文献

- ¹⁾ 厚生労働省（2015）：ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）結果。
- ²⁾ 厚生労働省（2014）：国民生活基礎調査 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/20-21.html>
- ³⁾ 佐藤至英（2014）：ホームレスに対する地域生活への移行支援－キリスト教団体による人間関係の回復－。北翔大学北方圏学術情報センター年報，6，93-95。
- ⁴⁾ 白波瀬達也（2007）：釜ヶ崎におけるホームレス伝道の社会学的考察－もうひとつの野宿者支援－。宗教と社会13，pp25-49。

付記

本研究報告は、平成26年度北方圏学術情報センター研究費の助成を受け、行ったものである。